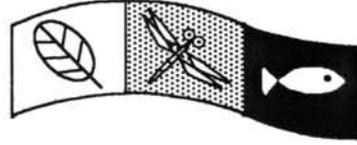
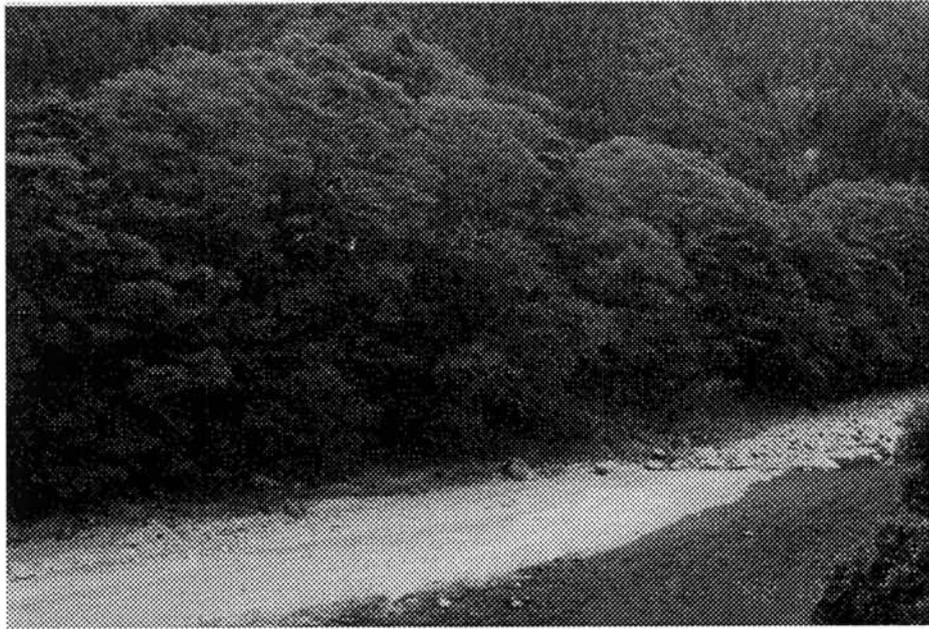


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 7



上流部(旭町宇内戸)河畔のケヤキ林(1998年10月20日 洲崎燈子 撮影)

*** 矢作川のさまざまな生き物 ***

矢作川の河川敷で見られるカミキリムシ

蟹江 昇

カミキリムシの多くは枯れた木を食べて育ち、成虫になってからも樹皮や葉を食べて、森林性の昆虫の代表です。矢作川の河川林には多くのカミキリムシが生息していますが、低地の森林に生息する種の他に山地にしか見られないような種もいくらか見られます。これらは上流域や周辺の山地から河川林に沿って分布を広げてきた種や、幼虫の入った枯れ枝が、洪水などで流されてきて分布を広げたものがあります。いずれにせよこれらのカミキリムシが生息できるためには、ある程度連続した樹林と餌となる樹木や花などが生えている

ことが条件となります。特にカミキリムシは他の食材性甲虫に比べ種ごとに食べる樹種が特定される傾向が強く、多様な種が生息する矢作川の河川は開発に追われたカミキリムシたちのオアシスとなっています。

今年の調査で見つかった興味深いカミキリについて少し紹介いたします。1つはカノコサビカミキリというカミキリです。体長10-12mmと小さな身体ですが、和名のように褐色の身体に白い小さな斑点が子鹿を連想させるかわいらしいムシです。暖地性のカミキリでおもに西日本の太平洋岸

に分布しており、愛知県からは豊橋市、知多半島に次ぐ3番目の記録となります。成虫は林縁の木にからまるカラスウリのツルに好んで集まりこれを食べます。お釣土場、野見町の河川林から見つかっていますが、カラスウリはいたる所に見られるので今後他の地域からも見つかるものと思われる。

ラミーカミキリは体長15-20mmの中型のカミキリです。明るい青緑色に黒色の紋が美しく目につきます。成虫は主に6-7月頃現われ、堤防の土手に生い茂るカラムシにあつまります。葉裏の葉脈や若い茎をかじるためその部分が枯れて目立ち、本種の生息がすぐにわかります。そのような枯れた部分を目印に注意深く探すと、葉陰などに隠れている可愛らしいカミキリを見つけることが出来るでしょう。本種は元々日本には分布しなかったものですが、戦前ロープの原料として輸入植

栽された麻について広まったといわれています。愛知県では三河地方の低山地で局地的に発見されていたが、温暖化の影響が近年急速に生息地を広げ、今では矢作川流域のほとんどの地域で見られるようになりました。

(かにえ のぼる, 日本鞘翅学会 会員・豊田市 矢作川研究所 共同研究員)



ラミーカミキリ(♂)

仔アユの死亡率を上げる温排水

新見 克也

最近あることを知り、矢作川の天然アユの未来について暗い気持ちになりました。そのことについて書こうと思います。

川でふ化したアユ仔魚は直ちに海まで流下することは良く知られていますが、その時の海水温が20℃を上回っていると死にやすいことはあまり知られていませんでした。しかし最近、「近年の海水温の上昇によって20℃を下回る時期が遅れ、早生まれのアユ仔魚が死んでいる」という、西日本科学技術研究所の高橋勇夫さんの研究で、海水温の問題がクローズアップされてきました。これは大きな問題ではありますが、気象現象（もとは人為的でしょうが）としての海水温上昇なので諦めもつきます。私が暗い気持ちになったのは、人間が直接上昇させている矢作川河口周辺の海水温のことです。

矢作川河口の近くには、3つのボイラーを持つ碧南火力発電所があります。ここでは海水を取り込み、蒸気タービンの冷却水として使用したあと、再び海に戻しています。その間に6.6℃程上昇した温排水は、周辺の海水温を上昇させます。この影

響で矢作川河口周辺の海水温は、三河湾の平均的な海水温よりも1~3℃高くなってしまいます。当然、河口周辺の海水温が20℃を下回る時期は周辺水域よりも遅れ、アユ仔魚が死ぬ確率も高くなります。また、碧南火力発電所は平成13~14年に第4・第5ボイラーを増設する計画を立てています。ボイラーの数が増えるだけではありません。第1~第3ボイラーの温排水の排水口は河口からやや離れた場所にあるのですが、第4・第5ボイラーの温排水の排水口は矢作川河口のすぐ横に造られるのです。これまでよりも河口周辺の海水温は上昇するでしょう。中・下流域で天然アユの産卵数を増やす努力をしても、海で殺してしまっただけにもなりません。もちろん中部電力は温排水の影響調査を行っていますが、アユ仔魚の生残については気付いていないと思います。大変な問題が急浮上してきました。矢作川研究所の仕事が一つ増えましたね。

(にいみ かつや, 矢作新報社 記者・天然アユ調査会 会員)

愛護会活動を始めて

今井 忠良

私たちが管理を任されている石倉水辺公園は竹藪がかなりの面積を占めている所ですが、昨年、市により生い茂っていた竹藪を切り開き散策道が新設されました。素晴らしい竹林の中の散策道になり、地元の人達を始め多くの人々が利用する場所となっています。

石倉の名前は川岸に高さ2m、長さ30m位の石垣があり、その基底は頑丈な牛柵で固められている護岸設備があることから付けられました。

平常時の川の水は、平戸橋下の岩盤にはじかれて東へ流れますが、洪水となって水が岩盤を乗り越えるようになると、本流がこの岸を直撃するので昔このような護岸設備が造られたそうです。

愛護会は昨年12月に会員15名で活動を始めましたが、発足当初はたいしたことはないと思安易に考えていました。確かに竹藪の中は雑草は生えないし、散策道ではごみを落とす人もありません。

ところが春から夏にかけて竹の子が無数に生え、放っておくとせつかく間引きしきれいになった竹林が、うっそうとした竹藪に戻ってしまうことから、皆で竹の子の頭を切って回りました。

その後、竹になったものは混み具合を見て古い

竹から伐採しています。若い竹は緑色で、年が経つと白い粉が付きだんだんに黄色くなってくるのでわかります。

とにかく竹の伐採は大変です。半日作業しても思った程広くはできません。また切ることよりも切った竹を広い場所まで出すのが重労働で、散策道が狭くて自動車が入らないため、人力でやるしかありません。集めた竹は野焼きしています。

会員の中には“こんなにえらくてはかなわん。やめたい。”と冗談に言う人もいます。

ここで石倉愛護会の直面している問題を皆さんに聞いてもらいたいと思います。

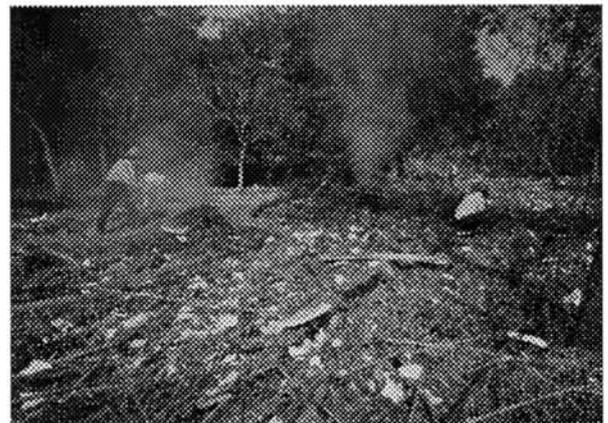
1. 会員を増やしたいが集まらない

現在の会員は60歳前後の人が多く、病気で参加できなくなった人もいて戦力が低下しており、新会員の勧誘に努めているがむずかしい状況です。

2. 竹・流木等の良い処理方法が見つからない

伐採した竹や矢作川増水時に流れてきた大量の流木・ごみ等は、野焼き処分しているが環境問題もあり困っています。

(いまい ただよし、石倉水辺愛護会 副会長)



愛護会の作業風景

